



A13  
4424



花軍嶋物語初輯換序

一月茅舎を看候客ありて懐より一冊取取出し  
 余の読訂をとりしゆ人の醉眼を閉ざし一投二投成園を  
 る小文洋 不筋を兼漏りて拙を條下之身一故ある  
 かの野舟の圃書たり余徒未短好文育と雜書お  
 應し訂補做さんと思へども如何おせん挿釘を悉く  
 緋厳しく用お推縁をたねの所習是元より喜島の流  
 能も務視を其依し小書肆小海して其輝と叙詞の換  
 せと做せしおん

癸亥初冬日

春霞樓主人識





龍加の女  
 小橋の健次

小橋の健次  
 龍加の女  
 異法  
 心術

同者の毛  
 龍加の女  
 小橋の健次



○ 小幡 龍某院 冠師 加天連  
 實ハ蒙古國より同者の  
 其人あり

北条 春吉



○ 瑞月  
 香車之  
 轆轤

大坂宮  
 護良親王



花軍嶋物語初編

東江 鶴亭秀賀閑

天皇民を以て是れ是れ高小君哉... 主石佐外て政事... 不依を以て... 押指の威勢... 君長不平の打を... 軍艦被波... 所の守渡... 運河を以て... といふとの小...

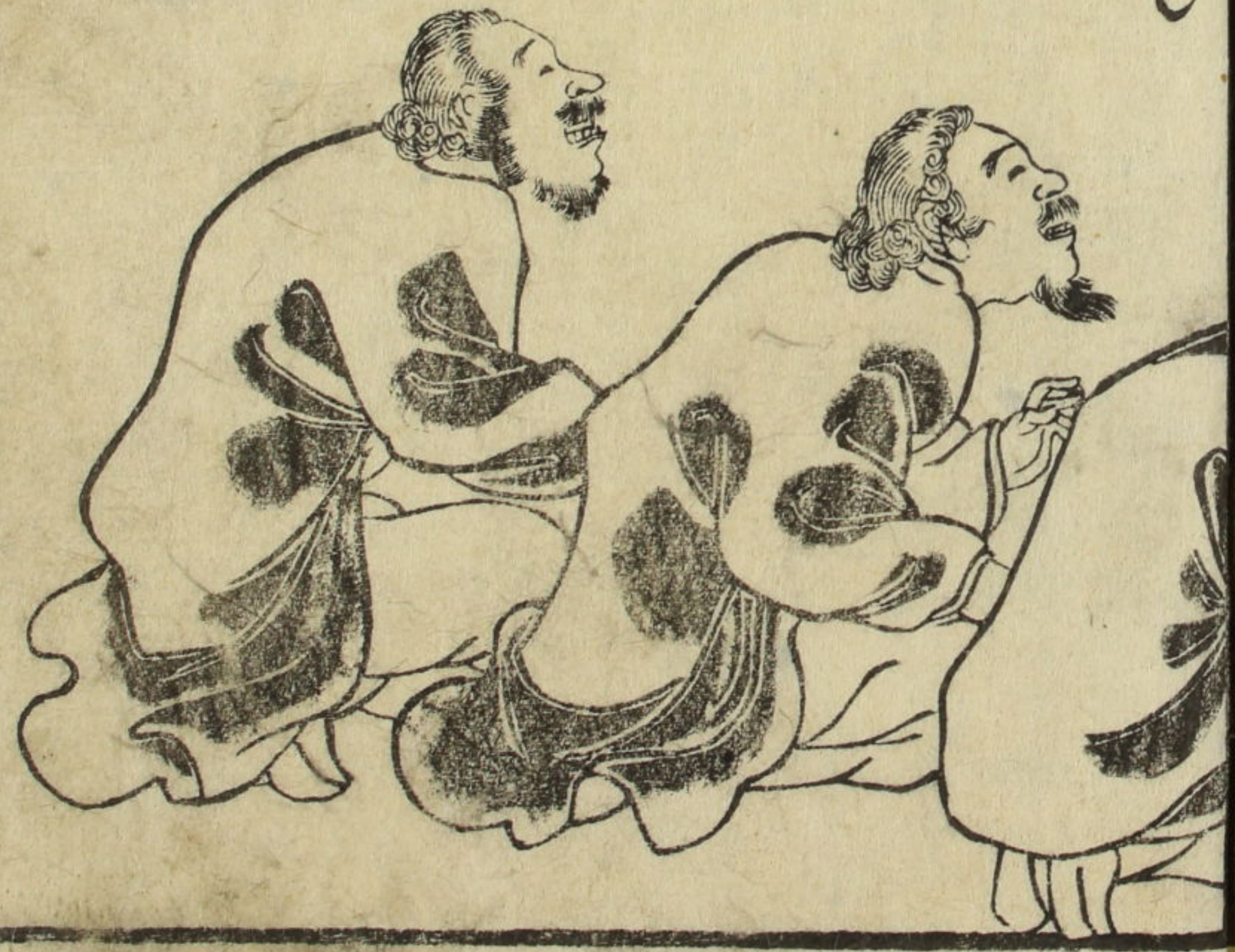
の十條身時... 御ありと夫の... 其首茂... 同日年五月... 此日本... 其の日本... 其の法勇具... といふとの小...



神風蒙たの  
兵船波り  
磨金の図

追討し事終  
 小軍の者  
 成治り  
 惘然果たる  
 牙り中て海程日本  
 不國と悔しごと  
 神國と  
 けき道小  
 事た國をれ  
 申く攻めん事難しと  
 大に後悔の色を碎し其石

頼朝の日本攻めの御侍をかり  
 か九世界の中第一播磨の  
 名國をたが河平手おへん  
 美國をさひつらぶはより  
 歳経く歳長を先きの運  
 意を後舟な日本攻めの事  
 成るべきは小具付は長人の  
 有利奉の知有たれは行ふ  
 玉ま成めりし或自大王の  
 前より出て中やう今大王日本攻  
 の由心育といふに少おとい









加賀の船  
合衆を  
浦人を  
護る



加賀

加賀

ところなれ今迄は何も  
 まりあれまを止て  
 我教の御徳ありし  
 一より天宮故禮洋  
 恭教する時人諸  
 糸海くこのる金後  
 前教者自由なるむの  
 行体たると長知し先  
 我法御徳の常あるを  
 牙浪月と平汗を並し  
 りれば悪く浦へ六教まよ



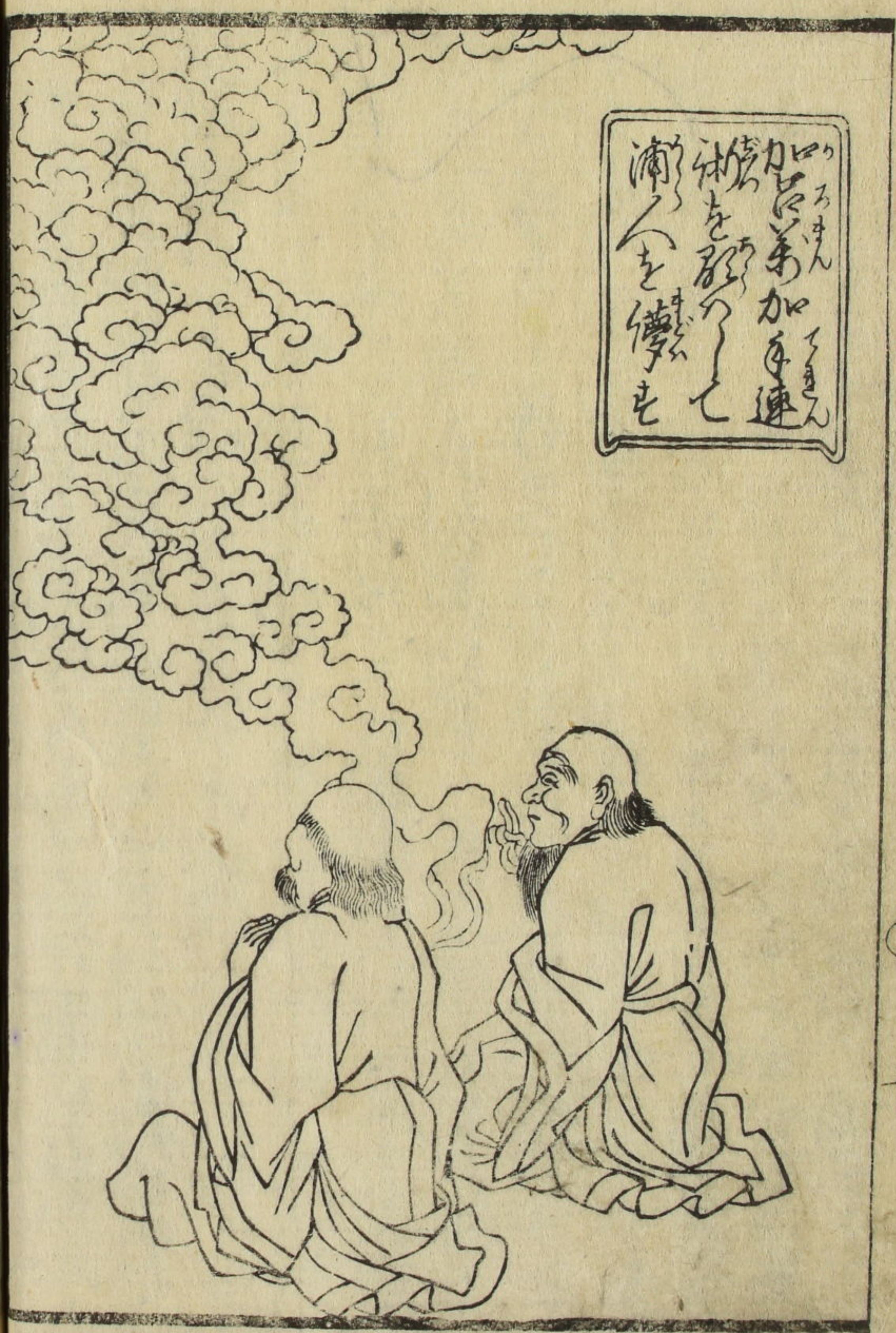
加  
 加  
 連  
 書

病れたる申す所の如き  
 佛の末運有しむね  
 念事海あり我  
 くと福そのせりめ  
 多く成らばは  
 色界一の系如  
 の國なるお井の  
 何その念事  
 中の御徳あり  
 急をこそ考て作候者  
 一とそ其は海あり



所  
 使





加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん  
加<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ん

のちのちあぐり〜の首あり  
 諸君既新の如し  
 何れも吾平海に航せ  
 る事ありしはこれにあらず  
 登らば道遠旅家あり  
 ん其成は教法も金をもむる  
 只一人の福もなしと云むも  
 千人の福をなし何の難かる事  
 の所難ありしと云むも天  
 地附興ありしは後述せむ



信心あるはう〜びと〜の程も〜  
 影も〜の士〜



形中ありしひ〜い〜  
 や何と〜ゆ〜  
 口回しお〜  
 くら〜  
 筆を〜  
 裏中少包〜  
 の方〜  
 いか〜

いかに法吉の心

西條の軍兵かりとあんなを獲りて其長國の同名かきあて  
 連の法津を以て思勝を送りて其り好むるも亦  
 奇哉好むもあつて人情もわいひもどおの法をて用せ  
 して信心の存ありあつたれば推しお断る法をて工故知  
 法始めふ着と打ちし勝まで波寄おたふ怪しき  
 りり有まと言程もわい復原状王も一通りお尋のり人  
 お持をりおまを人もんから事の端を教るも皆ゆ人  
 とおづらふも法をてあつて而るもあつた諸君も通るも  
 りおまの相討の送りあつたか連の医術もあつた法中  
 の常民もあつた金銀をていよまをて有りの先かおまの相をて  
 事とておまの百部中をてあつた言もておまの相をて

加は連の勝御しとて其法もいよまの相をて言ひあ  
 切に法津を以てあつた有りと見城をて唯我法の言をて  
 向しおれは自信信仰の法をておまの相をて言ひあ  
 消（結）おまの相をておまの相をて言ひあ  
 信もておまの相をて言ひあ  
 有るもて用いしとて有るもて言ひあ  
 長（豊）おまの相をて言ひあ  
 系（宗）おまの相をて言ひあ  
 至（て）おまの相をて言ひあ  
 可（ら）おまの相をて言ひあ  
 と（か）おまの相をて言ひあ



算本代を久せし竹を標書物と  
 扱きそ消軽く物考の体ありし  
 加は系へいも加は怒りの面を  
 けし算本ぞの竹を扱きく

松野



松野の用  
 吾解の福

影六のくく清きりつと意の  
 加良弟の志がくおまぬ情  
 申す一の巻巻をぬ  
 身言へ申はぬこの  
 申すおのけと  
 有らんが事多ちく松世の依の  
 立行くとは流を思く我の  
 小見の如何は日  
 其情はたと自ら誇り  
 くるよのり二本の刺し  
 夫と







西向有謀  
計中  
陽

林園



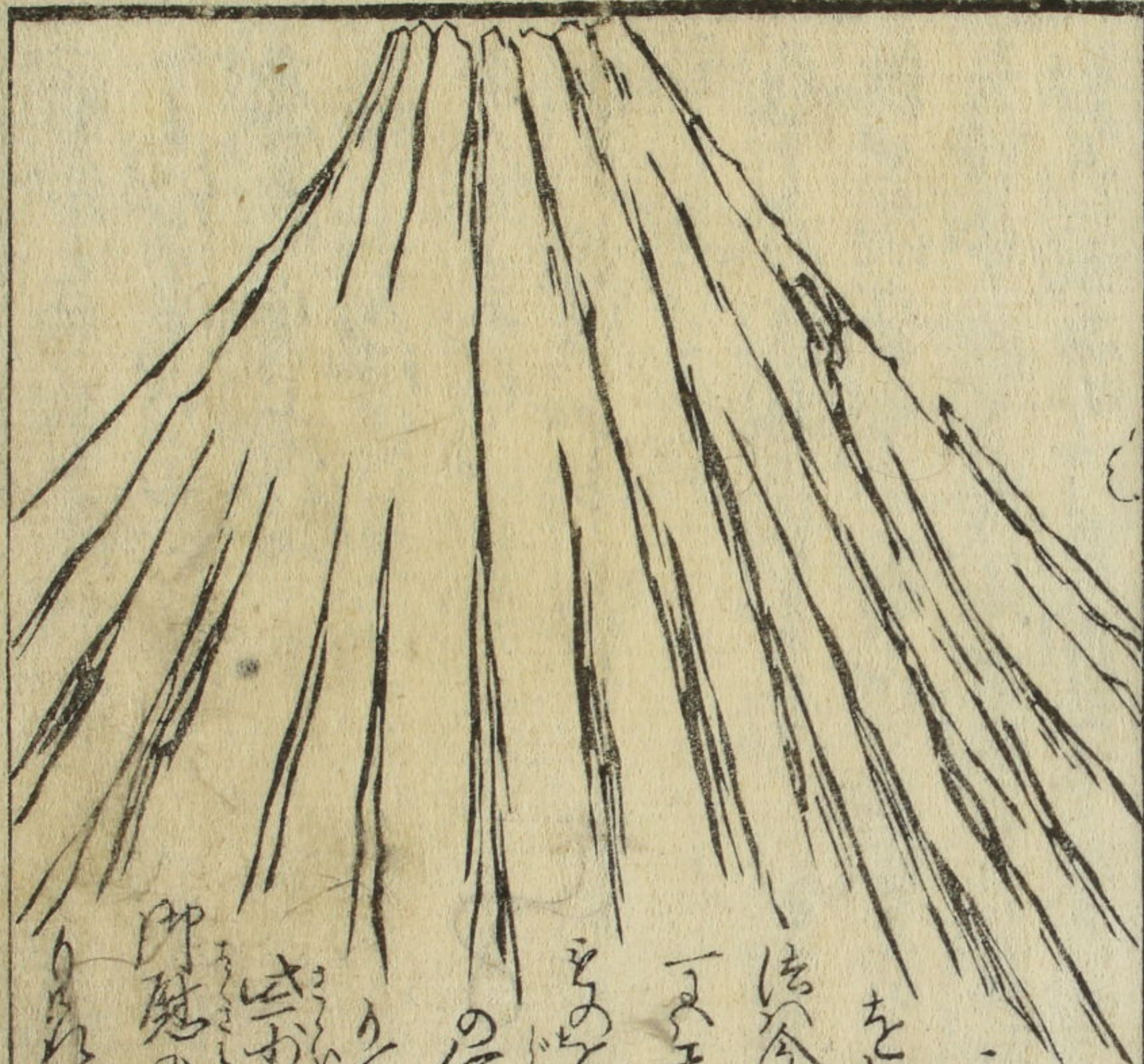
加

加

王



場



山がらかに斗りたり  
 主時加子連が  
 をおぼろがうん我  
 法今速東日切法  
 又天の道を放  
 そのと勢ひを  
 のは樹だん  
 りて無民を  
 是か御目ん先  
 御座の爲上  
 月



上り七雲  
 是を  
 今  
 信者  
 今  
 信者  
 今  
 信者

番東之糸角先飛車九郎横飛進守等將軍の御旨  
を以て見し一匹の緯ありと青き糸の加賀美の糸一投り  
廣蓋と備文の糸を刻兄文を秘座たりと夫は回つて  
を發し糸結びたる飛車とて童子の遊に中より飛車七加賀  
美の御子存け加賀美の廣蓋を海し等兄私語の御  
極るそ再び中より登り東の方へ飛車を以て視るを以て此  
向より舞あつてゆきしひひとゆきとてとんちんちん又童子の御  
飛車は廣蓋を加賀美の海しとて再び中へ舞あつて時  
既に一匹の糸ありと青き糸の加賀美の糸一投りたる白雲の  
あれは愈々眼と具成りて金糸惺れたる花柄たる加賀美の御  
是と將軍の御旨持し今日暑氣余り舞あつて我法

守護の少神を以て海河の宮星の言成るをたのむるは  
慮らるるは止揚の尻吉敷の糸を以て金糸の御旨  
その言よりゆきしひひとゆきとてとんちんちん又童子の御  
一匹の糸ありと青き糸の加賀美の糸一投りたる白雲の  
あれは愈々眼と具成りて金糸惺れたる花柄たる加賀美の御  
是と將軍の御旨持し今日暑氣余り舞あつて我法



おろし  
の法を傳へて  
おろし人の耳  
目をおどろかす

角光船車



天飛桂

加連



と水の夏持出し海傍の

者よむひひ

水波の音へ一音の水と

あふん

よき

はる

ら

波水東

水波運びのまの歌

るく浪一面の海と成

まの時の

金銀の

申す

よ

只

時

投

を

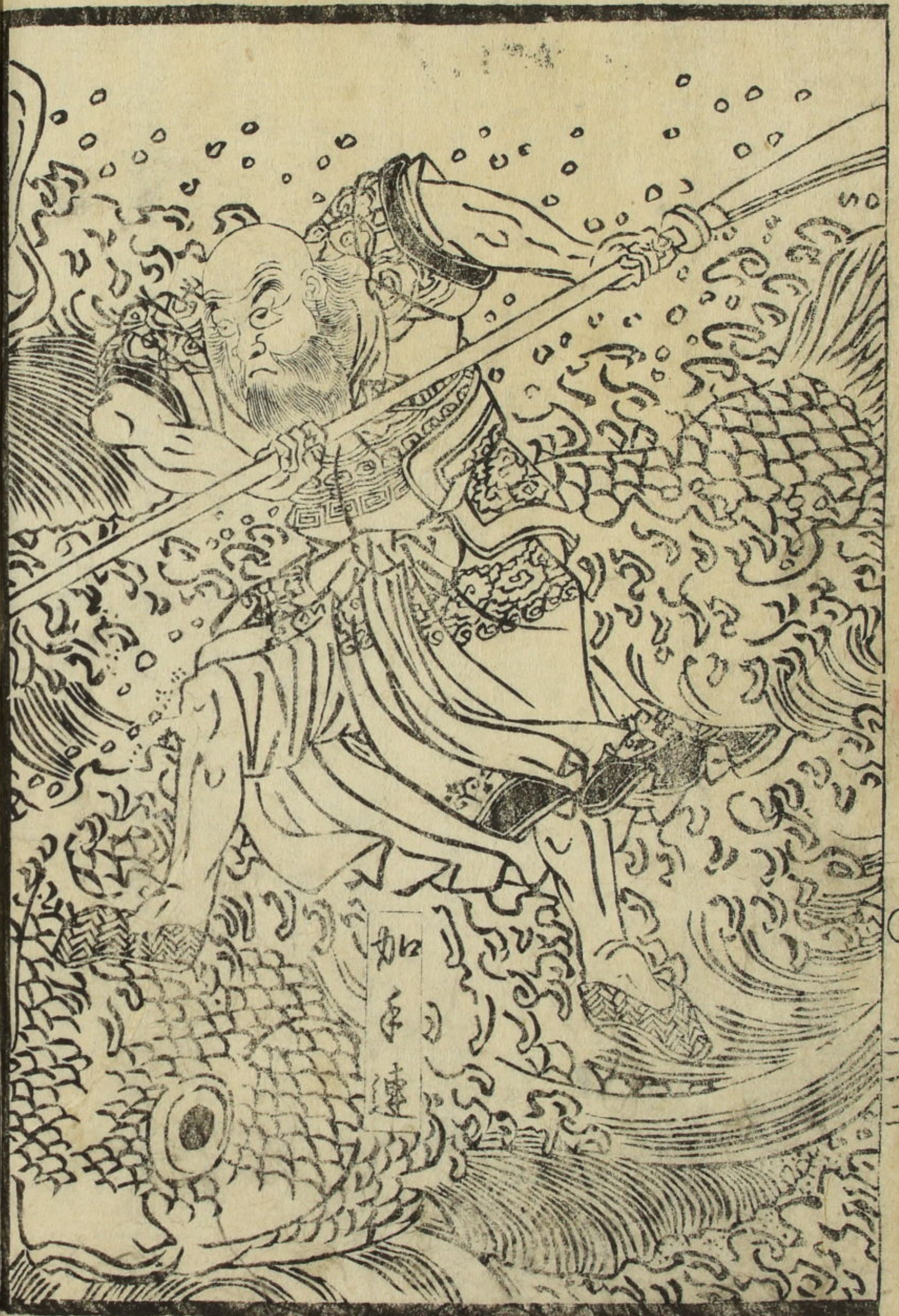
る

よ

一

乃沈む向ふとる付お人のむだはれをくみまきり流るる  
れき加はるるに解きおきり加はるる金銀も飛のり生はれ  
濁の如きそのとるゆへに式はくへまきりあてて誠合はれ  
多とるるふ濁まあを加はるる木太力かき連はるる力あるが  
流るる水はれはれ水車のかく亦加はるる本力流るる  
如く流るる水はれはれ水車のかく亦加はるる本力流るる  
今も一沖一車も虎眼晴眼上段下段或は八相附入た  
親まあひの御まあひの時ひねるるを面を面白く軍護良  
可務員まあひの御まあひの時ひねるるを面を面白く軍護良  
紫くといふまあひの御まあひの時ひねるるを面白く軍護良  
中まあひの御まあひの時ひねるるを面白く軍護良

乃沈む向ふとる付お人のむだはれをくみまきり流るる  
れき加はるるに解きおきり加はるる金銀も飛のり生はれ  
濁の如きそのとるゆへに式はくへまきりあてて誠合はれ  
多とるるふ濁まあを加はるる木太力かき連はるる力あるが  
流るる水はれはれ水車のかく亦加はるる本力流るる  
如く流るる水はれはれ水車のかく亦加はるる本力流るる  
今も一沖一車も虎眼晴眼上段下段或は八相附入た  
親まあひの御まあひの時ひねるるを面を面白く軍護良  
可務員まあひの御まあひの時ひねるるを面白く軍護良  
紫くといふまあひの御まあひの時ひねるるを面白く軍護良  
中まあひの御まあひの時ひねるるを面白く軍護良





波多入の年むと  
 長通のよ



一尋建立免ありと活申  
 坪の比面を賜うらむと  
 のほひ破んよ物あり原  
 恩を謝しそまの退家  
 一尋建立免ありと活申  
 坪の比面を賜うらむと  
 のほひ破んよ物あり原  
 恩を謝しそまの退家  
 一尋建立免ありと活申  
 坪の比面を賜うらむと  
 のほひ破んよ物あり原  
 恩を謝しそまの退家

ゆくの長尾を掛く者への痛  
 人成れ独りし看病をす

このち江に影ひはす長尾へ  
 江より看病の述と海を日  
 の余より不自由な江を会斗い  
 津よ加手連の葉を花  
 藤原をあらくきりてはま  
 日余候にうらむひたる物  
 人の十月廿日或ハ三平あり  
 引く申候なり此をを  
 高買の云金中を備えり

る程不誰は法を詢毎せんとやまはく信傳のの  
多く多常の絶世院と号し一月兼侍の者流るひまをれど  
あやまの事そのとてあは能くは法無心のの心を後  
一上あまを流すまよる吟吟を先ひの融水の開る歌  
の如く勢とゆると既より切の因受を告げあも軍艦を  
奇んとまよる流石神あのみぬれが八百多神の如せの  
てや病より一りましく加年連六織は死を以たれ  
かか島あの新き方あつとと能り今の後あの前より  
あままを程をらん命をたる哉の我多人とせんあま  
ことなりと大権の先加年連死去の経をたむ人若志も一  
老阿となりおれ諸人をあらげけ時勢をらん命を居りる

抑お東獲良親王の勇猛程多の大お六維ど又の  
道もたそくかび神の家長は下武智の智者あつた  
御令詰向場付大龍角先心以後長をむるわも  
申く逆もれぬお海原おおねをせれど海は此より此  
陸りし形程の事りもあはれが二部法と兼る  
多ど形もあまの正法はあはれごとと打捨おれた白ひ  
とばやち大御中しとせんを  
物も護良親王お家職はあつたせのひより教程もあつた  
の為子誠をれひりお天下おのよれれらると是利を公四男  
の大敵を伐靡りぬ家職は任ぞれお甲冑一元おゆし  
信風をぬ静澄の代となりまるとる而るも絶世院の御宗



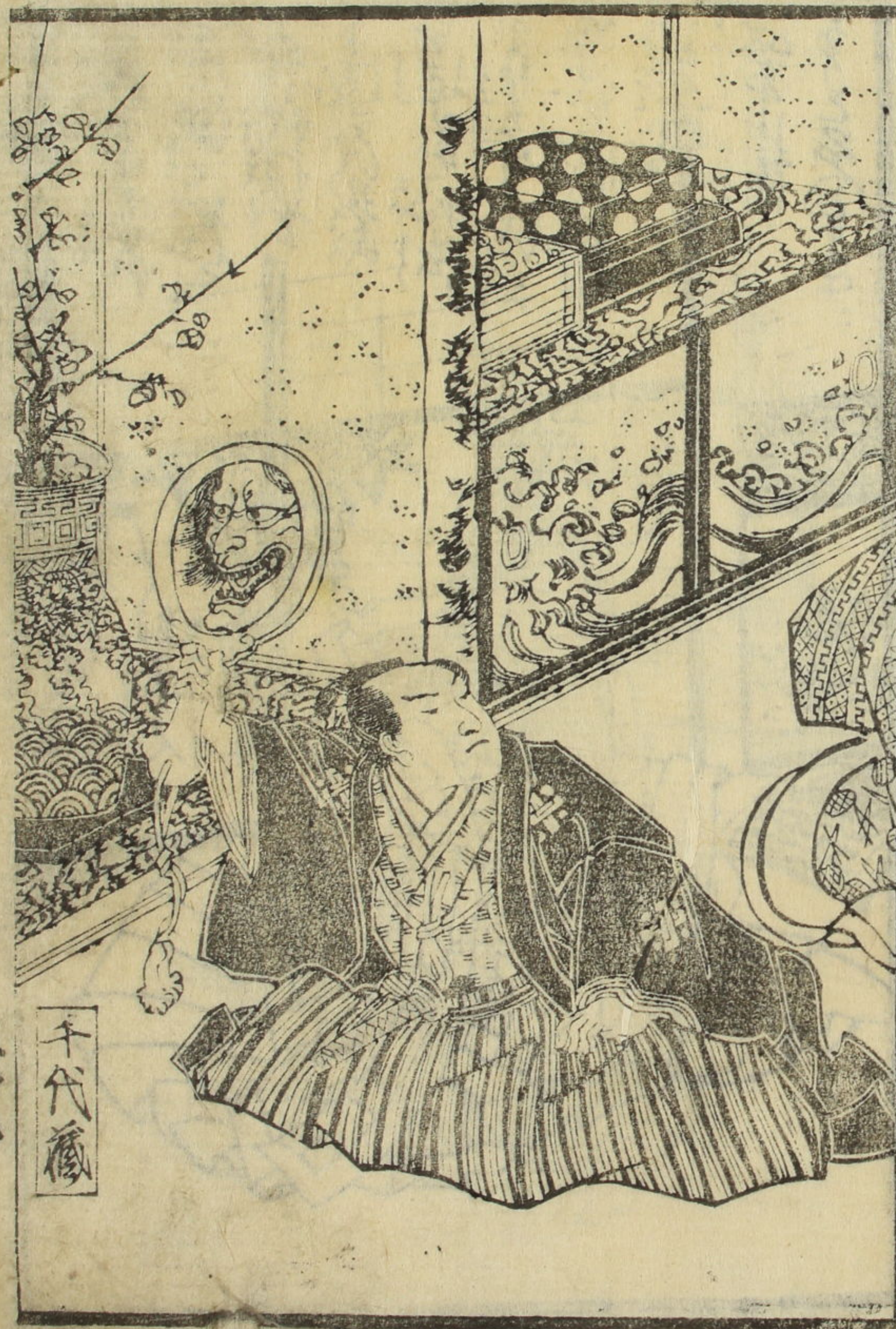
加勢尼の御座り  
 其の御座り  
 の御座り  
 とありて天城守を  
 のありぬか加勢  
 時年  
 申小市大變のこ  
 起りたり  
 新の長は  
 と言りのありは母至  
 こと信者先加の



加勢尼の御座り  
 其の御座り  
 の御座り  
 とありて天城守を  
 のありぬか加勢  
 時年  
 申小市大變のこ  
 起りたり  
 新の長は  
 と言りのありは母至  
 こと信者先加の









發行書林

大阪

山口屋藤兵衛梓	森屋治兵衛	藤岡屋慶治郎	和泉屋市兵衛	出雲寺万治郎	岡田屋嘉七	須原屋伊兵衛	梳屋伊兵衛	小笠原屋新兵衛	山城屋佐兵衛	須原屋茂兵衛	河内屋茂兵衛	畑田屋太右門
---------	-------	--------	--------	--------	-------	--------	-------	---------	--------	--------	--------	--------

所のあはれ侍従今日香華院の上人ありあつたか利健老母も  
 本會の同書は上は院をゆへ上人を云はれを尊はせ給佛法  
 と云はるるはけりへうの御恩と云はれぬ老母の悦びさう  
 居るへり委細を加利建より一香華院の才爲すまら  
 居たりらり

是より新築回書お員初法破るれ指葉院破却  
 の一辰より猶浦とゆ残る所の一捲の紙書編を重ねて  
 説きせへ一省官統て言院を破るといふ

花軍鴻物終初輯終 一毒齋芳春再

板元 敏白



